

「台湾と日本の懸け橋に」

宮城県南三陸町の南三陸
ホテル観洋で就業体験を
機に社員となった台湾出身
の魏禎怡さん(23)が奮闘し
ている。南三陸の人たち
の温かさに触れ、東日本大
震災の被災地で就職を決
意。旅行者をもてなす宿
泊業を通じて「台湾と日本

の懸け橋になりたい」と願
う。
魏さんは台中の静宜大で
日本語を専攻。子どもの頃
から家族の影響で日本の文
化やドラマ番組に興味を持
ち、日本で語学を生かせる
仕事を目指していた。
2011年の震災発生時
は中学生。テレビで見た津
波は「とても恐ろしかった」
と今も脳裏に焼き付いてい
る。震災後、台湾紅十字組

2020年4月6日(月) 河北新報

あすへ
東日本大震災

魏さん南三陸で奮闘

就業体験から
ホテル社員に

織が南三陸病院の再建を支
援するなどつながりを深め
ていると知り、町に親近感
が湧いた。

大学4年の時、ホテル観
洋が募集した1年間の就業
体験に参加。接客や配膳、
客室清掃など宿泊業のイロ
ハを身をもって学んだ。

来日前は「日本人は冷た
い」という印象を持ってい
たが、「従業員や町の人た
ちに温かく接してもらい、
台湾にいた時よりも人のつ
ながりを感じた」。多くの
人に支えられ、就業体験を
全うした。

今年1月、晴れて社員に
なった。今は主に朝食や夕
食の接客を担う。流ちょう
な日本語で客と積極的にコ
ミュニケーションを図り、
台湾の魅力も伝えている。

ホテル観洋は近年、台湾
からの誘客に力を入れている。
副支配人の昆野守裕さ
ん(48)は「魏さんにはホー
ムページの翻訳を担っても
らい、台湾への情報発信で
も力を借りている」と頼り
にする。

言葉遣いや接客の作法な
ど覚えることはまだまだあ
るが、持ち前の向上心で一
人前を目指す。「ゆくゆく
はフロント業務に就き、台
湾からの旅行者を出迎えた
い」と思い描く。



客にコーヒーを差し出す魏さん(右)